



お元気ですか。高原剛一郎です。

今日はユダヤ入門シリーズ、また続けて参りたいと思いますが、その前に、先日私はこういう本を読みました。『知ってるだけで避けられる！ 危ない前兆』

生きてると“青天の霹靂（せいてんのへきれき）”という言葉があるように、思いがけないタイミングで、思ってもみないような事が身に降りかかって来た、なんてことがありますよね。急に病気をしたり、急にトラブルに巻き込まれたり、色んなことがあるんですが、見る人が見たら「突然起こったことではない。必ず前兆があったのだ」と言うんですね。

この本に紹介してある事例として、皆さんの玄関周り、例えばインターホンとか表札の側面や郵便受けなどに、妙なマークやシールが付いてるといことがありませんか？ そのようなマークやシールが付いている場合、プロの空き巣によってロックオンされている可能性があると言うんです。多くの空き巣というのはプロですよ。行き当たりばったり空き巣に入るようなことはしません。人目が少ない家・入りやすい家・逃げやすい所、そういうものを下見して、ここが一番大丈夫だという所を色々チームで回っているようですね。

アルソック/ALSOK のホームページを見ますと、郵便受けやインターホンの側面に“M”と書いてある場合は男性の一人住まい。“W”は女性の一人住まい。“S”はシングル・独り者。“SS”は土日休日で留守だよ、という意味があるそうです。もしそういったものを見つけたなら直ぐに消す。ないしは警察に相談することを勧めると書いてありました。見る人が見たら、これは空き巣狙いの前兆かもしれないと言うんですね。

ところで、バイブルを見ると、世の終わりにも前兆がある。大きな時代の前にちゃんと前兆がある。人類はやがて終末時代に突入します。その前に、必ず起こることがいくつかある。その前兆について、バイブルは語っているんですね。今日は、イエス・キリストご自身が語られた終末預言とその前兆についてお話したいと思います。

イエスが十字架に掛かる数日前のこと。12人の弟子たち/12弟子を引き連れて、エルサレムの神殿に入って行きます。エルサレム神殿は、ヘロデ大王がBC20年に拡張工事を始めました。イエスがエルサレムに入った時、まだ工事をしている最中なんですね。これを語っているのはAD30年ですから、建築期間50年で、まだ完成していないという壮大なすごい建物。“エルサレム神殿を見ないうちは、人は、美しいものを見たと言うことは出来ない”という格言が当時あったくらい壮大な美しい建物。それがエルサレム神殿だったんです。

イエスの弟子たちは、イスカリオテ・ユダ以外は殆どが、ガリラヤというユダヤの田舎の地方出身者なので、お上りさんみたいに「すごいなあ。先生、これ見てください。何てごっつい建物なんですか。

神殿で素晴らしいですねえ」と言うんですね。ところがイエスは、「この建物に目を見張っているのですか。この建物が、石が一つも崩されずには残らない。そういう時代が来ます。」

神殿は石が積み上げられて出来ていたので、“石が一つも崩されずには残らない”というのは、木っ端微塵になるという意味です。“みんなが目を見張っている神殿が木っ端微塵になる時が来る”と預言するんですね。

不安になった弟子たちが「えっ！そんなこと、いつあるんですか？ それが起こる前に、どんな前兆があるんでしょうか？ 世の終わりの前兆・エルサレム崩壊の前兆、そして、あなたが再臨する前兆はいったい何ですか？」

ここから、イエス・キリストの終末預言が語られるようになるのです。

不安に駆られて質問する弟子たちに、イエス・キリストはこのように語られました。

ルカの福音書 21 章 20～21 節

しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その（エルサレムの）滅亡が近づいたことを悟りなさい。そのとき、ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。都の中にいる人たちはそこから出て行きなさい。田舎にいる人たちは都（エルサレム）に入ってははいけません。

ルカの福音書 21 章 22～23 節

書かれていることがすべて成就する、報復の日々だからです。それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。この地に大きな苦難があり、この民に御怒りが臨むからです。

ルカの福音書 21 章 24 節

人々は剣の刃に倒れ、捕虜となって、あらゆる国の人々のところに連れて行かれ、異邦人の時が満ちるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。（*聖書 新改訳 2017）

十字架に掛かる直前の話です。エルサレム神殿から出て行かれる時に、この問答が始まりますね。イエスはここで、“メシアとして登場したのに拒否してしまう、この時代のユダヤ民族の人々にどんなことが起こるのか。それはエルサレム崩壊である”という裁きについての預言を語るんです。

しかし、非常に矛盾に満ちたことを言われました。

“エルサレムの滅亡はいつ始まりますか？ 前兆は何ですか？”ということについて、「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。」

エルサレムが軍隊に囲まれたら、それが滅亡の前兆だ。

と同時に、「そのとき、ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。都の中にいる人たちは、そこから出て行きなさい。田舎にいる人たちは都に入ってははいけません。」

これって矛盾ですよ。だって、エルサレムは誰も逃げる事が出来ないように、外国軍隊によって包囲されてるんです。軍隊に包囲されていながら、どうして脱走することが出来るでしょう？

この不思議な言葉が実際に歴史上で実現していった時、“なるほど！ こういうことだったのか！”とハッキリ分かるんです。イエスの預言の言葉が文字通り実現していく。これからちょうど 40 年後の AD70 年に、エルサレムが滅亡するのです。

ところで、イエスがユダヤの世界におられた時代、ローマから遣わされた行政長官がいました。新約聖書の中では“総督・ローマ総督”と紹介されています。総督はローマの植民地支配において、最高権力を持つ最高責任者で、ローマ皇帝に対して直接責任を担うという絶大な権限を持っている人です。イエスがいた時代のローマ総督はピラト。5代目のローマ総督でした。

イエスが十字架に掛かり、墓に葬られ、3日目によみがえって、それから入れ替わり立ち代わり、色んなローマ総督が出て来るんですが、最後に、とんでもない最低最悪のローマ総督が現れるのです。その人物はゲシウス・フロルス。彼はなぜユダヤの総督になりたかったんでしょう？

ローマ帝国は、生粋のローマ人でなくても、ローマに忠誠を尽くす人たちに市民権をドンドン与えていったんですね。それが、ローマ帝国が息長く続いた秘訣です。

フロルスはローマ総督（AD64-66）ですが、民族的にはギリシア人なんです。彼はヘレニズム文明/ギリシア文明をこよなく愛し、誇りに思っていました。ヒューマニズムをこよなく愛していました。そして、その対極にあるヘブライズム、唯一神を信仰しているユダヤ人の文化を心から軽蔑していたのです。ユダヤ人大嫌いでしたねえ。権力欲・物欲・あらゆる欲の塊みたいな人物。そんなに嫌いなユダヤ人の行政長官に、何でなるんだ？

総督という仕事は給料が無かったんです。なのに、何でそんな仕事するかというと、あまりにも役得が多かった。ユダヤに限らず、植民地の総督になると、1年務めるだけで一生遊んで暮らせるような財産を築くことが出来たんです。それを数年続けたら、莫大な資産家になりますよね。その資産を持ってローマに帰るんです。そしてあわよくば、その資産でローマ皇帝のお近づきになり、ある場合は、ローマ皇帝の側近どころか、自分自身がローマ皇帝になることすらもあり得たんですね。

その前もヒドイ総督だったんですが、フロルスと比べたら人徳者に見えるくらい、フロルスは酷かったというんですね。彼の奥さんはクレオパトラ。エジプトの最後の女王クレオパトラとは別人ですよ。クレオパトラは“父の栄光”という意味があって、今でもギリシア人には人気の女性の名前です。私が昔ギリシアに旅行で行った時、ガイドさんの名前がクレオパトラで、「えっ！クレオパトラですかっ！」「いえいえ、よくある名前です。」

それはともかく、フロルスの奥さんクレオパトラは、当時のローマ皇帝ネロの奥さんの友達だったんですね。この奥さん友達つながりで、フロルスは「ユダヤの総督にしてください！」と手を回し、嘆願して聞き入れられたので、ユダヤ総督に赴任することが出来たんです。

つまり、金のためにユダヤの総督になりました。ユダヤ人を愛していません。ユダヤの文明から何かを学ぼうなんてつもりはサラサラないんですね。ですから、ユダヤ人たちが一番大切にしているもの、神聖なものとして重んじているものを弄びました。

彼は色々悪いことをするのですが、自分がやろうとすることをユダヤ人たちは良く思っていないと分かっていたので、片っ端から処刑していくんです。処刑方法の中には十字架処刑がありました。十字架処刑は、ローマの市民権を持っている者には絶対しちゃいけないことです。

当時、エルサレムにはローマ市民権を持っているユダヤ人たちもたくさんいたんですが、その人たちもただユダヤ人だというだけで、片っ端から十字架に掛けて殺した男がフロルスです。

また、彼は物欲の固まりで金（かね）が欲しいんです。たくさんの税金を巻き上げて私腹を肥やしていく。それだけでは満足できず、とうとう神殿の中に入って行って、神に献げた純金 17 タラントを強奪するんです。ローマの秤では 1 タラント 41 キロとされています。

現在 金 1 グラム 6,900 円くらいですか。それで計算すると 48 億円ですよ。

神殿の一番大事な金（きん）、神殿の色んな所を塗ったり、様々な器具の保守点検するものを全部、私財にするために強奪する。ユダヤ人の懐から取るのではなく、ユダヤ人が最も重んじている、神聖なものと考えている神殿の中に入って強奪する、ということまでやってしまうのです。

これでとうとう、ユダヤ人たちの堪忍袋の緒が切れてしまうんですね。

そして、ユダヤ反乱が始まりました。これが AD66 年の出来事です。

当時ユダヤ人社会の中には、穏健派もいるし過激派の人たちもいました。

過激派の人たち・民族主義過激派のことを熱心党／ゼロタイと言います。彼らは初めは少数派でした。やっぱりユダヤ人たちは、ローマに対して、戦力で圧倒的に不利なわけですね。

あちこちにローマの兵隊たちがいてる中で、太刀打ちできないだろうということで、彼らはあくまでも例外者だったのです。

が、フロルスの時代、“ここまでムチャクチャされて、黙ってていいのか！”と、それまで穏健派だった人たちも熱心党になびいてズワーツ！熱心党がブワーツ膨れ上がるという時代があったんです。そしてとうとう、フロルスがローマの軍隊率いてエルサレムに入って来た時に反乱が起こって、なんと、熱心党たちがフロルス・ローマ軍をやっつけてしまったんです。

ローマ軍の正規軍隊に素人軍隊が勝てるはずがないと、フロルスは完全に舐めてたんですけど、民族心の一致と宗教心が燃え上がった。神殿が汚されたということで、頭に血がカーツとなってますね。ローマ兵が約 6 千人、惨殺されてしまうのです。

フロルスは這う這うの体（ほうほうのてい）で逃げるだけではなく、何とか手を打たなければならないということで、当時シリア州にいたケスティオスという将軍に援軍を頼みました。

ここでしっぽ巻いて逃げてしまったら、勢いづいたユダヤ反乱軍がますます増長するのは目に見えている。小さな火のうちに、徹底的に叩きのめさなければならない。この火を完全に吹き消していなければならない。それで、ケスティオス将軍に頼んで、大軍を送ってもらうことにしたのです。

シリア州は大きな州で、戦略的に非常に重要な場所でもあったので、ここには 4 つのローマの軍団がありました。この軍団のことをレギオンと言います。1 レギオンが大体 5 千～6 千人。ほぼ 6 千人。これが 4 軍団。その中でも最強が第 12 軍団。

そこに、他の軍団から 2 千人の選抜された精鋭部隊をプラスし、それ以外にも歩兵 6 大隊、騎兵 4 中隊、諸国連合の色んな助っ人軍隊を呼びまして、2 万だか 3 万人だか、とにかく大軍を率いて、シリアからずーっと南下して、遂にエルサレムをぐるっと囲んだんです。

ローマの正規軍で、ホントに無敵の軍隊ですよ。その第 12 軍団＋色んな特殊部隊を揃えた軍団が、城壁で囲まれているエルサレムを、外側からぐるっと囲んだんですね。

その時、エルサレムの中にいた人たちはどう思ったんでしょう？ ローマに反乱した熱心党の人たちも内心、こんなに急に たくさんの軍隊が勢揃いで投入されるとまでは思ってなかったんでしょう。度肝を抜かれたんですね。臆病風に吹かれる人たちがたくさん出て来ました。秘かにエルサレムから脱出して、よそに逃げて行く人たちがどんどん出て来たんです。

また、エルサレムの、兵隊ではない一般市民も心が傾いていました。

「我々はフロルス嫌いやし、ローマの圧政イヤだけど、戦争はもっとイヤ。エルサレムが戦場になって血まみれになるのは見たくない。ここは一つ妥協して、エルサレムの扉を開いて、ローマ軍を“歓迎しまーす”と迎え入れましょう。そして平和的に、何とかまる〜く穏便に収めてもらいましょう。」

ローマが取り巻いているだけで、中にいる人たちは内心ビビりまくっているんですね。かぼそい首に両手が掛かってる。クツと絞めたら、エルサレムは首がポキッと折れます。あと 止めを刺したらいいだけ！ あと ひと押し、止めを刺すのにあと一歩！という時に、なぜか分からないけど、非常に不思議なことをケスティオスがするんです。何でしょう？

突然ですよ、「軍隊を撤収する！」と言って、帰って行くんです。もう勝ちが目に見えてるんですよ。もうしばらく包囲してたら、エルサレムの人たちは投降する。あるいは、一気に強引に攻め込んだら、武器や軍隊の数が違うので、短期決戦でエルサレム軍を壊滅させることが出来たんです。にもかかわらず、勝利一歩手前まで来てるのに、何を思ったか、ケスティオスは「帰る！撤収！」と軍隊に命じて、数万の軍隊を引き上げて行くんですね。

さて 今私が話している内容は、ヨセフスの『ユダヤ戦記』という本の中からの抜粋をご紹介します。ヨセフスはユダヤの歴史家で、この一部始終を観察してるんですが、あと一歩で完勝するのが見えてるのに、理由も無しに軍隊を撤収したことに對して、『ユダヤ戦記』の中で頭抱えてるんです。なぜ、こんな不可解なことをするんだ？ こんな不合理なことをするんだ？ 全然理にかなっていないじゃないか。いったい何が起こったんだ？ どういうことなんだ？ 私の頭では分からない！

彼は歴史家として、何とか理由を付けないといけないと考えたんでしょう。

彼特有の神学というか、“エルサレムに立て籠っている人たちがあまりにも邪悪なので、神は徹底的に裁くために、苦しみが短いように短期決戦でという解決ではなく、一時的な勝利を与えたのではないか” みたいなことが書いてあります。

それはともかく、軍隊がずーっと撤収して行った時に一番驚いたのは、「もう我々は滅亡する」と覚悟を決めていたユダヤ反乱軍/熱心党の人たちでした。なぜか分からないけど撤収しているのを見て、彼らは勢いづくんですね。“我々の士気の高さを見て怖気づいたんではないか。神が我々に加勢し味方に付いたので、目に見えない靈に怯えて撤収したのではないか。”

軍隊は、進んで行く時よりも撤退する時が一番危険なんです。これはローマ軍にも言えることでした。エルサレムから北西に 20 キロ行った所に、ベテホロンという山間（やまあい）の地域があって、溪谷の細い道があります。数万のケスティオス・ローマ軍がそこに差しかけた時、ユダヤ軍が襲いかかるんです。ケスティオス軍はメチャクチャにやられて大変な損害を被り、武器を置いて、這う這うの体でシリアまで逃げ帰りました。

襲いかかったユダヤ反乱軍、どうしましたか？ ローマ軍が置いていった武器を戦利品として持ち帰り、歌を歌いながらエルサレムに帰って行った。「我々は勝利した！ ローマの正規軍に勝ったんだ！」意気揚々と帰って行った。

その後、ユダヤの人たちはどうなったでしょう？ ローマに勝ったと思ってしまうんです。

「ローマを蹴散らした！」そして約 1 年半の間 平和な時代を満喫し、「我々は遂に独立を勝ち取った」ということでコインまで発行して。“エルサレムは聖なる町である” “シオンの解放” “シオンの贖い（あがない）のために” とヘブライ語で書いて。

“エルサレムのために頑張ったら神が祝福してくれて、あの天下無敵のローマでも、しっぽ巻いて逃げてしまったわ！” みたいな意気軒昂の状態になったんですね。

ところで、軍隊に囲まれたけど、囲んだ軍隊は何一つ攻撃することなく去って行った。なぜ去って行ったのか、歴史家もよく分からない。理由もないのに去って行ったという、その理由が分からない。今に至るまで、この理由について色んな方が色んなことを言うけど、どれもこれも説明になってない。

ただ1つはつきり言えることは、これが起こる 36 年前にイエス・キリストがこう仰っていたのです。
「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。そのとき、ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。」

なぜ逃げれるんですか？ 囲んだのに、自発的に包囲が解かれるからです。
このイエスの言葉を信じたユダヤ人たちは、包囲が解かれた時に、その言葉に従ってエルサレムから脱出しました。

脱出してどこに行ったんでしょう？ ヨルダン川を超えてペラという町です。
ペラは、あのギリシアの英雄アレキサンドロスが生まれた町なんですね。
ペラに逃げたユダヤ人たち、すなわち、イエスの言葉に従って、ペラという山に逃げて行ったユダヤ人たちは、その 4 年後に起こるユダヤ戦争・エルサレム壊滅作戦の時、みんな命を長らえることが出来たのです

しかし、“ローマ兵をやっつけることが出来たのは我々の士気が高かったからだ。” “我々の軍事作戦が優秀だったからだ。” “神のご加護があるから我々は無敵なんだ” と、小さな成功体験を勘違いして、エルサレムに断固として立て籠ろうとした人たちは、みんな全滅しました。

ところで、聖書の預言の中には、終末預言や裁きの預言があるのですが、裁きの預言を語る時には必ず、そこからの脱出の道についても語っています。裁きを語る時には必ず、救いの道についても証しをするのです。いや、救われて欲しいがために、近づいている危機について語っているのです。

あらゆる危険には前兆がある。その前兆をなぜ語っているのでしょうか？
この前兆が来たら脱出の道を選んでもらいたいという、救いを得させたいための裁きのメッセージだと言えるでしょう。

聖書は警告の書物です。ただ人々を怖がらせるための本ではなく、救いを得させる神の言葉なのです。

いかがでしょうか。

終末期や時代の激変期は、過去の歴史に似たようなことがたくさん出てるんですね。
私たちは温故知新で、歴史に様々な教訓を学ぶことが出来るんじゃないでしょうか。
特に このユダヤの国の滅亡を通して、様々なことを教えられるのではないかなと思います。

今回は、『ユダヤ戦記』の中から、ユダヤ戦争の中身について、突っ込んでご紹介したいと思います。
どうぞ皆さま、お付き合いくだされば感謝でございます。
また『ごうちゃんねる』でお目にかかりたいと思います。それでは皆さん、さよなら!!

*使用した聖書は『聖書 新改訳 2017』です。